

龍を描いた弥生土器

時代：弥生時代後期

調査名：唐古・鍵遺跡 第48次調査

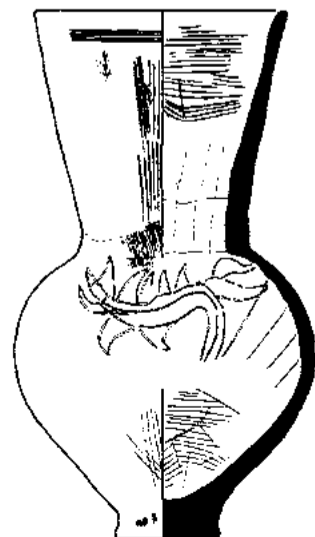
発見年：1991年

大きさ：高さ24.0cm、幅19.7cm

龍は、中国に起源をもつ空想上の生き物で、日本文化の中にもすっかり定着しています。この龍は一体いつ頃日本に伝わり、どのようにして広まったのでしょうか。

日本で最古の龍として知られているのは、弥生時代後期の北部九州に伝播した中国・後漢時代の鏡に描かれている精緻な龍です。近畿地方では、倭人自らが弥生土器に描いた龍が存在しています。今回は、そのような龍のひとつを紹介しましょう。

この龍は弥生時代後期後半の^{ひろくちつぼ}広口壺に描かれた^{しゃふつ}煮沸による^{すす}煤の付着がみられることから日常生活に使われた一般的な土器でしょう。この龍は池上曾根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）の^{ちょうけいつぼ}長頸壺に描かれた龍のように写実的ではなく、退化した描き方でS字状の胴部に^{かぎ}鉤状の脚の表現がみられます。唐古・鍵遺跡では、このような描き方の龍の他、記号や文様になった龍も多くあります。唐古・鍵遺跡を含め近畿地方中央部には、このような土器に描かれた龍があり、弥生時代後期の倭人社会に龍神信仰が定着していた可能性があります。



池上曾根遺跡出土の絵画土器「龍」

出典（財団法人大阪文化財センター
1979『池上遺跡・四ツ池遺跡
発掘調査報告書』第二分冊）

